四國五郎著

わが青春の記録（全2巻）刊行概要

◉解　説　有光　健〈シベリア抑留者支援・記録センター代表世話人〉
川口隆行〈広島大学大学院教育学研究科准教授〉
四國　光〈四國五郎　長男〉

◉体　裁　B5判・上製・総約1、100頁　総頁カラー

◉巻末付録　辻詩（8点）、ナホトカスケッチ（4点）、豆日記、四國直登（弟）の日記（翻刻）など

◉揃定価　本体48、000円＋税（分売不可）

ISBN978-4-908976-62-9

◉推　薦　ジョン・W・ダワー〈歴史学者〉
小沢節子〈日本近現代史研究者〉
栗原俊雄〈毎日新聞社記者〉

※『わが青春の記録』の原本は1、000頁を超えているため、造本の都合で上下全2巻といたしました。

※『わが青春の記録』『豆日記』全頁撮影：鹿田義彦

作者紹介

四國五郎（1924～2014）

広島県出身。画家・詩人。

シベリア抑留後、被爆した故郷広島に戻り、反核平和運動を進めた。その活動は、「広島平和美術展」の創設、「市民の手で原爆の絵を」プロジェクトへの協力など多岐にわたる。第18回広島文化賞受賞。代表的な作品に以下のものがある。

〈表紙・挿画〉『原爆詩集』（峠三吉著　ガリ版刷り）
『絵本　おこりじぞう』（金の星社）

『わが青春の記録』執筆当時の四國五郎、1949年（25歳）

わが青春の記録　目次（抄録）

《上巻》
・ぷれりゆど
・一年生
・製靴所　第二班
・父の死
・太平洋戦争
・空襲

《下巻》
・シベリアへ！
・6号生活
・カンバヤシ大隊
・さらば！　ゴーリン
・ハバロフスク
・残留
・暁に祈る
・反戦カンパニア

《下巻巻末付録》
・豆日記
・ナホトカスケッチ
・四國直登（弟）の日記（1945年8月分を翻刻）
・辻詩
・徴兵検査
・13125部隊入隊
・母の髪
・開戦！
・降伏
・集結地民主グループ　第二回総会
・帰りなん　いざ！
・人民ロシア讃歌
・ダモイ列車の詩
・いわゆる人民裁判
・私のレジスタンス
・解説（有光　健）
・解説（川口隆行）
・解説（四國　光）
・四國五郎　略年譜・主要著作一覧

本書のキーワード（お薦めする方）
シベリア抑留／引揚げ／「民主運動」／戦争体験と表現／戦後文化運動／戦争体験を伝える資料（対象：高等学校以上）

三人社
〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4　白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369

●表示はすべて税別

ご注文は書店様または直接上記までお申し込みください。

2017/9

戦争そしてシベリア抑留を経て……「平和のために描く」ことを選んだ反戦詩画人の記録！

『絵本　おこりじぞう』の装丁・挿絵で知られる四國五郎は二十歳で徴兵され、ソ満国境で死線をくぐった。敗戦によるシベリア抑留の後、帰国した彼を待っていたのは故郷広島の惨状と弟の被爆死であった。記憶が遠のくことを恐れるように、収容所から命がけで持ち帰った『豆日記』を頼りに自身の半生を1、000頁の画文集として刻んだ。稀有な**戦争・抑留・民主運動**の記録、70年の時を経て、初の公刊！

画と文　**四國五郎**

わが青春の記録

総頁カラー《全2巻》

◉解説　有光　健・川口隆行・四國　光

◉価格　本体48、000円＋税

◉刊行　2017年12月

「伐採作業」フルムリ地区207分所　1946年2月
四國五郎　1997.8

三人社

ジョン・W・ダワー（MIT名誉教授）からのメッセージ

1945年8月、広島と長崎が原爆攻撃を受けた時には、アメリカ合衆国のみが核兵器保有国でした。現在では9か国の「核保有国」が存在し、近い将来、その数は恐らくもっと増えるかもしれません。日本もその中に入るかもしれません。考えただけでも恐ろしいことですが、しかし、それを想像することがもはや不可能ではない状況です。

軍国主義が広島の悲劇を生み出し、多くの死傷者を出し、生き延びた人たちも苦しみと悲しみを舐め続けたことを、私たちは決して忘れてはなりません。四國五郎の情熱的な反戦芸術は傑出しており、そうした悲劇の記憶の方法の一つとしてかけがえのないものです。

四國五郎の偉大な貢献は、核兵器の恐ろしさを伝えるのみならず、同時にそれとは対照的なものを描き出す彼の能力にあります。死に対する生命、憎悪とは反対の愛、恐怖とは対照的な希望が彼の芸術には込められています。

今から10年前の終戦60周年の折、四國五郎の絵画に感動し、私が勤めていたマサチューセッツ工科大学のオンライン・プロジェクトに彼の作品を載せました。今も、彼の作品は、さらに力強く、いままでよりももっと迫るような形で、私個人だけではなく、彼の作品を目にするすべての人に語りかけてきます。

ジョン・W・ダワー
（翻訳：田中利幸　歴史家）

Message from John Dower

When Hiroshima and Nagasaki were bombed in August 1945, the United States was the only country that possessed the nuclear weapons. Now there are nine “nuclear-weapons nations”, and soon there may be more. Japan could even be among them—a terrible thought, but no longer impossible to contemplate.

We must never forget the militarism that led to Hiroshima, the tragedy of those who were killed, the suffering and grief of those who survived. And the passionate antiwar artwork of Shikoku Goro is a brilliant—indeed, indispensable—way of remembering.

Shikoku Goro’s great contribution lies in his ability to convey, at one and the same time, not just nuclear horror, but also the opposite of this. His art sets life against death, love against hate, hope against fear.

Ten years ago, on the 60th anniversary of the end of the war, I was moved to present some of Shikoku Goro’s work in an online project at my university, Massachusetts Institute of Technology. Today, he speaks to me—and to all of us—more powerfully and urgently than ever.

John W. Dower

このメッセージは『四國五郎追悼回顧展』（2015年4月・広島）に寄せられたものです

推薦のことば

個人史にして奇跡的な歴史書

栗原俊雄〈毎日新聞社記者〉

二〇一七年春、それを初めてみたとき、とっさに言葉が出てこなかった。「こんなにすごいものが……。どうやって残ったんだろう。」

頭に浮かんだのはそういう言葉だ。四國五郎が残した『わが青春の記録』。千ページに及ぶ分厚い画文集にはまず、大正から昭和にかけて広島の山間部と都市部で、戦争や経済的困窮に翻弄されながら四國五郎少年が家族の愛に包まれて育つ様子が情感豊かに書かれている。日々の生活を描き、さらに文字でつづる希有な才能を持った四國による、貴重な庶民史だ。

それ以上に私が驚いたのは、シベリア抑留時代の記録である。十年以上、抑留の取材と執筆を続けている。一九四五年八月の敗戦後も、日本にとっての戦争は続いていた。ソ連がおよそ六十万人を不当に拘束した。国際法違反の抑留、重労働と飢え、極寒によって六万人が死んだ。人類史に黒々と刻まれるべき抑留は、「民主運動」なしに語ることはできない。しかしながら、運動に関わった人による手記は極めて少ない。四國は、その内面をありありと描いている。

ソ連は国際法違反の蛮行を隠すために、抑留の実態を伝える文書や絵を持ち出すことを固く禁じた。違反したら厳罰に処した。四國はその危険をおかし、現地でのメモを持ち帰った。それが本書の源流だ。超人的な画力と文章力、さらには勇気によってなった本書は四國の個人史であると同時に、未曽有の悲劇を歴史に刻印する歴史書である。

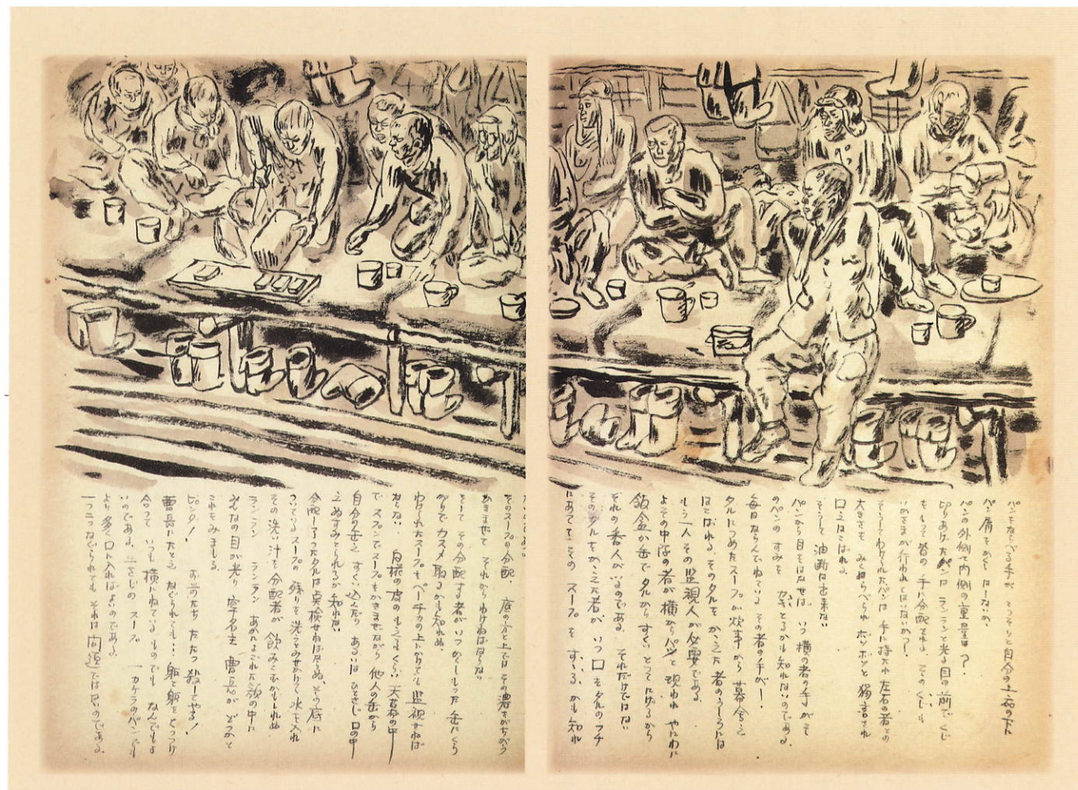
「広島の画家」「平和の画家」
――その生い立ちとシベリア体験

小沢節子〈日本近現代史研究者〉

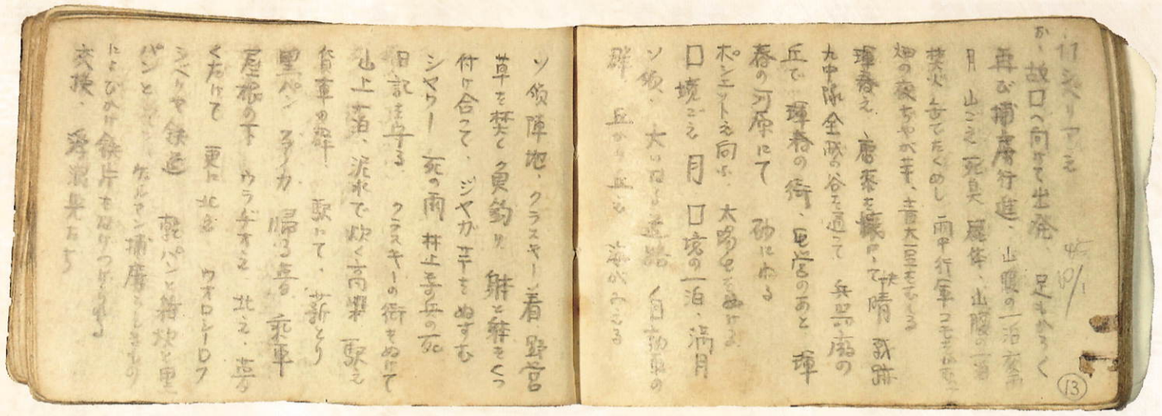
「ロマンチシズムと進歩的レアリズムの結びつきが人びとを高め前進させる」、「五郎はそのもっている感覚の浪漫性と象徴性をレアリズムにしっかりと結びつけておけ！」――

「わが青春の記録」の最後の頁には、絵筆を握る自画像とともに、時代に向き合う画家としての四國五郎の決意が、このように宣言されている。その言葉どおり、サークル誌『われらの詩』や峠三吉『原爆詩集』（ガリ版刷り）の表紙画、「辻詩」ポスターと、四國は瑞々しい情感と怒りを湛えた表現を次々とうちだしていく。「わが青春の記録」は、朝鮮戦争下の街頭の文化運動の息吹を現在に伝えるこれらの表現とその方法論が、シベリア体験の中で培われたことを明らかにする。その意味で、近年盛んになった五十年代サークル運動研究に、抑留体験からの連続性という新たな視点をつけ加えるものともいえよう。なによりも、貧しさ故に美術教育はもとより高等教育を受けることもかなわず、貸本屋の『大菩薩峠』等の挿し絵を懸命に模写して独学した若者にとって、シベリア体験は社会と芸術についての新たな学びの場だった。シベリアで身につけたコミュニズムはその後の年月の中で変容していくが、四國は生涯、「ロマンチシズムとレアリズムの結びつき」を手放すことなく、広島の人びとの被爆体験を描く画家へと成長していく。「広島の画家」「平和の画家」として、再評価の高まる四國五郎の原点がここにある。

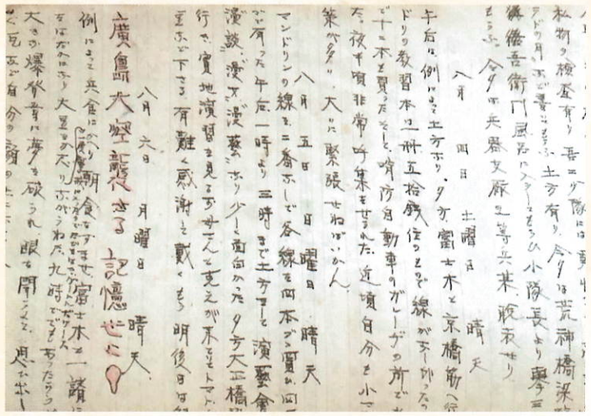
「集結地民主グループ第二回総会　十二月のなかば強い吹雪の日　第三分所で集結地民主グループの総会を二日間ぶっ通しでひらいた」（本文より）



「パンから目をはなせば　いつ横の者の手がそのパンのすみを　カキとるかも知れないのである　毎日ならんでねているその者の手が！　タルにつめたスープが炊事から幕舎えはこばれるそのタルをかかえた者のうしろにはもう一人その監視人が必要である」（本文より）



「豆日記」
シベリア抑留中の生活の記録を克明に記録したもの。「スパイ罪」での逮捕も覚悟の上、帰国の際に軍靴の中に隠して、命がけで持ち帰った。全頁掲載。

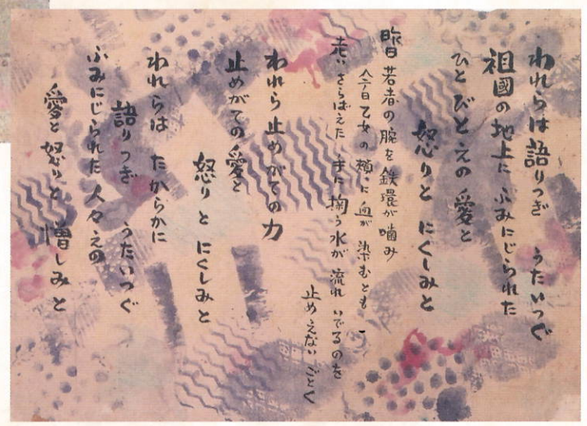


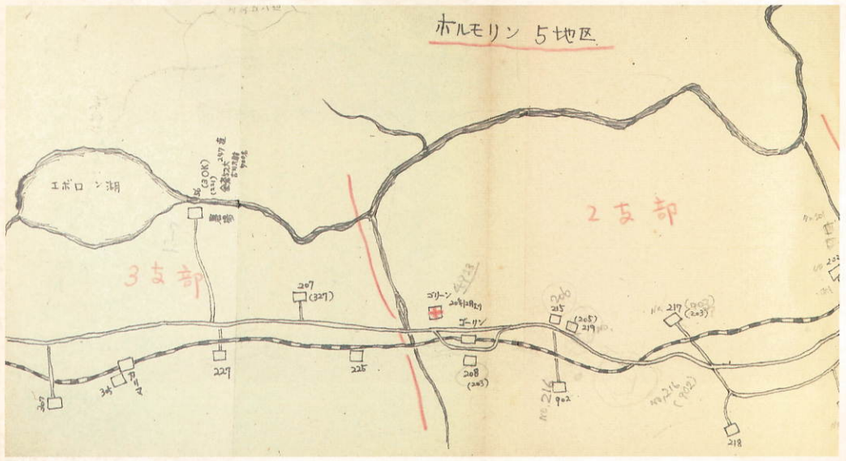
「弟 四國直登の日記（1945年8月6日）」
被爆前後の8月1日～27日までの日記を翻刻し、下巻巻末に収録。弟直登は8月28日に被爆障害で亡くなる直前まで克明に日記を記した。貴重な被爆体験の記録であるとともに、帰国直後にこの日記を読んだ兄五郎は反戦詩画人として生きる決意を固めた。

「弟・直登（左）15歳、兄・五郎（右）18歳 1943年」

「辻詩」
GHQの言論統制下、逮捕覚悟で詩と絵による手描きの反戦反核ポスターを街頭に貼りだす。その表現を「辻説法」になぞらえて「辻詩」と呼んだ。現存する全8点を掲載。

「ナホトカスケッチ」
シベリア抑留での最終集結地、ナホトカにて描いたスケッチ。『豆日記』と同じく、帰国の際に日本に持ち帰った。





収容所付近の地図
1945年10月下旬にエポロン湖近くのフルムリ（ホルモリン）地区に従事する。道路補修・建築作業に従事するも、翌年春を前に栄養失調と過労で生死の境をさまよった。（本文掲載）

関連図書

峠三吉没後60周年記念出版

われらの詩（うた）

本誌は、「原爆詩人」峠三吉を中心に創刊されたサークル詩誌である。ここに集った若き詩人たちは、戦後の政治的混乱のなかで、後世に残る数多くの作品を創作した。被爆都市広島で生まれた市民たちの声を、反戦と平和の記録として、また、戦後社会運動や文学研究の資料として、関連雑誌類と共に復刻する。

われらの詩の会　1949-53年
復刻版　全2巻・別巻1・付録1
◉解説＝宇野田尚哉・川口隆行・海老根勲
◉揃価格＝本体70,000円＋税

収録誌一覧
われらの詩　反戦詩歌詩集
広島文学サークル　とざえざる詩
風のように炎のように
「原爆詩集」峠三吉自筆稿本